

## 今後の世界遺産登録の方向性（登録に向けたアプローチ）の検討について

### 1 趣旨

鳴門海峡の渦潮の世界遺産登録に向け、兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録検討会議（以下「検討会議」という。）を設置し、自然及び文化の学術調査委員会の調査結果、海外連携の成果等を踏まえ、世界遺産登録に向けたストーリー（方向性・アプローチ）を検討する。

### 2 検討会議の位置づけ

推進協議会規約第10条第1項に基づく部会として設置。（R5.9.29）  
（自然及び文化の学術調査委員会と同様）

### 3 検討会議の運営

- (1) 検討会議は、3人の学識者と4人の行政機関の職員で構成する。
- (2) 3人の学識者は、自然と文化の各学術調査委員会の代表と、世界遺産登録制度に詳しい者から選任する。
- (3) 行政機関の職員は、兵庫県、徳島県、南あわじ市、鳴門市から1人ずつ選任する。
- (4) 検討会議の代表者については、自然と文化の学術調査委員会から選任された学識者による共同代表とする。
- (5) オブザーバーとして、プレック研究所世界遺産センター長が就く。

#### ■ 有識者

中瀬 勲 氏（兵庫県立人と自然の博物館館長、自然側学術調査委員会委員長）

【専門分野：造園学・景観計画、農学】

金田 章裕 氏（京都府立京都学・歴彩館館長、文化側学術調査委員会委員長）

【専門分野：人文地理学、歴史地理学】

吉田 正人 氏（筑波大学世界遺産学教授）

【専門分野：生態学、世界遺産学】

[オブザーバー]

大野 渉 氏（株式会社プレック研究所 世界遺産センター長）

〔兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録検討会議〕 ◎：共同代表

役 職	所属・役職	氏名
◎委員	兵庫県立人と自然の博物館 館長	中瀬 勲
◎委員	京都府立京都学・歴彩館 館長	金田 章裕
委員	筑波大学 世界遺産学学位プログラム 教授	吉田 正人
委員	兵庫県淡路県民局 局長	藤原 祥隆
委員	徳島県未来創生文化部長	佐藤 泰司
委員	南あわじ市総務企画部付 部長	家田 和幸
委員	鳴門市産業振興部 部長	阿部 聡
オブザーバー	株式会社プレック研究所 世界遺産センター長	大野 渉

#### 4 方向性の決定方法

検討会議で方向性を検討し、幹事会での協議を経て、最終的には総会で方向性を決定する。

#### 5 検討会議の進め方

年度	会 議	時 期	協 議 事 項
R 5	第1回検討会議 (神戸市内)	1月23日	○これまでの調査研究結果のとりまとめの確認と評価 ○令和7年度以降の「鳴門海峡の渦潮」の世界遺産登録に向けた取組 ○自然遺産及び文化遺産をめざすストーリーの検討(自由討議)
	(幹事会②)	2月6日	・検討状況の報告
	(総 会)	3月18日	・検討状況の報告
R 6	第2回検討会議	6月	○世界遺産登録をめざすストーリー(骨格案)の審議 ○ストーリーの肉付けに必要な内容の確認
	(幹事会①)	7月	・検討状況の報告
	第3回検討会議	9月	○肉付けした世界遺産登録をめざすストーリー(素案)の審議
	第4回検討会議	12月	○世界遺産登録をめざすストーリー(案)の審議と決定、幹事会への提示
	(幹事会②)	2月	・世界遺産登録の方向性(登録に向けたアプローチ)の決定
	(総 会)	3月	・世界遺産登録の方向性(登録に向けたアプローチ)の決定、公表

## 6 第1回検討会議の発言要旨

### ○ 自然遺産をめざすためのアピールポイント

- ・ 現在、環境省では、新たな世界自然遺産の候補を検討する動きはないため、「鳴門海峡の渦潮」を入れてもらうにはどうしたらいいかが大きな課題である。日本で「地形・地質」の評価基準で登録されたものはないが、この基準に合致するものが日本に全くないはずはないので、新たに検討していただけないかと要請してはどうか。

### ○ 文化遺産をめざすうえでの課題

- ・ 国の指定を受けているのは、名勝と福永家住宅の2つだけであり、他は国の指定を受けていないか、不動産ではない動産である。文化遺産として考えたとき、ほとんど対象から外れてしまうのが大きな問題である。
- ・ 自立した形で文化的な要素を主張して文化遺産に向けて形になるかという、極めて難しいのではないかと思う。
- ・ 文化財保護法でいうと「重要文化的景観」という比較的新しい枠組みがあり、鳴門海峡周辺は、日本の文化財保護法に基づき「重要文化的景観」に登録できるようなどころがあると思っている。そういったところを評価していくことにより国内法の担保ができる可能性はある。

### ○ 複合遺産をめざすのはどうか

- ・ 「鳴門海峡の渦潮」は、日本に1つもない複合遺産として、検討していただけないかと要請してはどうか。何か新たな方向性を出さないと、突破口が開けない。
- ・ 複合遺産の可能性はあり、是非チャレンジしたらどうか。例えば、「奄美・沖縄」は、候補に上がってから登録まで相当時間がかかった。時間がかかった理由は、すでに顕著な普遍的価値はあったが、保護地域としては、海岸部が国立公園になっているだけで、国立公園ではなかった。よって、その時点では、世界自然遺産にするのはかなり難しいとされていたが、遺産登録に必要な保護担保措置を後から付け足していき、世界自然遺産として登録することができた。
- ・ 複合遺産は、文化遺産としても自然遺産としてもそれぞれ自立できる価値があるということが前提にないと、複合遺産にはならない。

### ○ 国へのアプローチについて

- ・ 世界遺産登録の方向性の議論について、手戻りがないように、ある程度国の感触や考え方をつかみながら、方向性を定めていった方がよいのではないかと。
- ・ 国へアプローチをするにも、ネットワークを生かし、誰を通じて話をすればよいかよく見極める必要があり、各委員にもご支援いただきたい。

- ・ 環境省へのアプローチについて、世界遺産登録を全面に出すと、門前払いになってしまう。これまでの学術調査研究の成果から、最初に国立公園に指定されたときの範囲は、渦潮を保護するという観点から狭すぎることが分かってきているため、最低限指定範囲を広げるとか、保護措置を強化していくとか渦潮を守るためにやれることを環境省に相談に行くという形がいいのではないかな。
- ・ 文化庁へのアプローチについて、文化の調査研究をしてきたとはいえ、世界文化遺産の価値基準を考えると、それをベースに暫定リスト入りをお願いしたとき、文化庁の審議会のハードルは高いと思う。環境省と同様に、重要文化的景観の選定の可能性や名勝の範囲を視点場だけでなく見られる側やその背景になる側も含めて広げていくような指定の仕方ができないかといった前向きな取組を相談していく形でアピールしたらどうか。

#### ○ 資産・緩衝地帯範囲はかなり狭いのではないかな

- ・ 今の資産・緩衝地帯候補範囲は、もし複合遺産を考えた場合かなり狭いと思う。島のいろいろな製塩や、石を使った文化を入れていくのであれば、今は抜けている沼島を検討に入れるべきであり、もう少し広めに考えていかないといけない。
- ・ 地形・地質の専門家によると、おもしろいのは瀬戸内海の形成であり、そこに淡路島があったがために鳴門海峡・明石海峡・紀淡海峡ができ、潮流の速い場所ができるということが世界でもユニークであることから、範囲を狭く考えてはいけないという方がいる。どの価値を押ししていくかということによって、範囲も考えなくてはならない。
- ・ 日本列島の形成の過程で考えて、なぜここがユニークな地形になり、渦潮が生まれたのかを考えないと、世界にアピールするにしても弱いと思う。

#### ○ 景観保全に関する両州市の連携

- ・ 両側の州市にとって、渦潮を中心に視点とその背景になる部分が、それぞれ立場が逆転するということは興味深いと思っている。別々にやるのも大事だが、一緒に景観を守っていく取組をアピールできると思う。
- ・ 南あわじ市と鳴門市で両側を見合っており、南あわじ市から見た鳴門市の景観を守るために鳴門市ががんばる、逆に鳴門市から見た南あわじ市の景観を守るために南あわじ市ががんばるという協力し合う例は、世界にあまりない。もしそういうことができれば、世界遺産に関わっている方にアピールできる。
- ・ 両市で一緒に「渦潮をテーマにした景観計画」をつくったらどうか。渦潮をテーマにするというのは、今までにない試みなので、是非一度議論したらよい。それがこの世界遺産登録に関わらなくても、2つの市にはすごく良いアイデアかと思う。

## ○ 国際シンポジウムについて

- ・ 国際シンポジウムには、どういう方を呼ぶかが重要である。鳴門海峡の渦潮の顕著な普遍的価値（OUV）をPRするためだけに海外の方を呼ぶのではなく、国際的に意味のあるテーマにした方がいいと思う。「お互いを思い合った景観」も1つのテーマになると思う。国際的に新規性があるって議論する必要があるようなテーマを打ち出し、それに見合った人を呼ぶということであれば、非常に意味のあるシンポジウムになるのでは。
- ・ 様々な場で、「温暖化」と「多様性」というテーマがよくあがる。このあたりをどう捉えて渦潮について議論するかが重要になると思う。行政としても避けて通れない大きなテーマになってきているので、アイデアのひとつとして考えていただきたい。
- ・ 海流や潮汐の干満差によってできる渦潮など、そういった自然現象をユネスコ世界遺産のカテゴリーに加えるべきという議論がなされたらいいと思う。
- ・ 最近の世界遺産委員会ではアフリカや中東の方のアピールが強く、欧米中心の考え方に真っ向から疑問を投げかけて新しい価値観を提案している。国際シンポジウムではそういった方々を呼ぶのもアイデアとしてあるのでは。